

株式会社 シガ木工

ものづくり技術

一般型

創業以来、筆筒製作で長年の実績 製作コスト低減により、新たな客層の獲得を狙う

事業内容

「紀州筆筒」の老舗メーカー 用途の拡大を狙った和筆筒の開発・製造

100年以上の業歴を有する伝統工芸筆筒メーカーで、「和歌山県100年企業表彰」も受けている。業界内でも古参企業に分類され、桐筆筒メーカーとして県内でも希少な存在となっている。

かつては、現在一般に使用されている和筆筒の製造工程の機械化にも貢献し、業界基準(事実上の標準とみなされる和筆筒の規格)の確立に際して、その一翼を担った。時代とともに和筆筒から洋筆筒に主流が移り変わる中でも、同社は和筆筒の製造をメイン事業とし、業界を牽引してきた。特に主力製品である「紀州筆筒」は経済産業大臣指定

伝統的工芸品に認定されており、その価値は広く知られている。

現在は、桐筆筒の販売に力を注いでおり、家具専門店や百貨店を中心に販路を確保している。代表自らが百貨店に赴き、桐筆筒の良さをアピールするための講演会を開催し、また「LIVING&DESIGN」といった展示会に出展するなど、幅広い世代に桐筆筒の魅力を伝えている。今年(2016年)の春からは、カラーバリエーションを備えた斬新な桐筆筒の販売を開始し、新たな市場の掘り起こしも図っている。

補助事業

ホットプレス、全自動プレス機の導入により 材質の向上を目指す

同社が手掛けてきた桐筆筒などの伝統的な製品の販売は伸び悩みをみせる一方で、フローリングの床に設置できる低価格な家具の販売は堅調に売上を伸ばしている。消費者の低価格志向が増しているうえに、桐筆筒などの伝統的な家具に触れる機会が減少していることもその背景として考えられる。

そのような状況でも、若い世代の女性層から「赤い桐筆筒」といった製作依頼が入るなど、従来には存在しなかった斬新な色彩の家具を求める声が聞かれるようになった。価値観が多様化するなかで、古くから培われてきた桐筆筒の優れた特長をそのままに、現代の生活スタイルに合うデザインを施した家具に対するニーズは高まっており、同社のカラフルな色彩をまとった桐筆筒は、新しい市場を切り開くポテンシャルを持っている。

しかしながら、現在の製造工程では販売価格をこれ以上抑えることは難しく、低価格志向の消費者に購入してもら

えないという課題があった。

そこで同社では、これまで製品に使用することが難しかった、反り曲がった桐材の材質向上を目指すことにした。今回の補助事業によって反り曲がりを矯正する「ホットプレス」と「全自動プレス機」を購入し、消費者のニーズに適應する桐製家具の試作・開発を試みた。



株式会社 シガ木工

代表取締役 志賀 啓二
〒640-8443 和歌山市延時13-4
TEL: 073-452-2011 FAX: 073-453-1304

〈業種〉桐製家具製造
〈創業〉1914年
〈資本金〉10,000千円
〈従業員〉9人

成果

試験的な製品開発では一定の成果 安定的な受注確保が課題

今回導入した「ホットプレス」、「全自動プレス」を利用することによって、桐材の反り曲がりを修正し、桐材の材質を向上させるのと同時に稀少な桐材の利用率向上を図った。具体的には、「ホットプレス」で熱を加えることで劇的に桐材の歪みが除去できるようになったという。和歌山県工業技術センターにて「耐候試験」や「高温高湿試験」を行い、反りの再反発についても検証を重ねている。

試験的な製品開発の段階では、一定の成果が見られるものの、受注を開始してまだ間もないこともあり、生産量は僅少で利益面への貢献はまだ少ない。安定的な受注の確保が、大きな課題となっており、百貨店などへの営業活動を継続的に進めていく。受注が堅調に伸びてくれば、10%～

20%程度の利益率向上が見込めるようで、今後の生産量増加に伴う利益率の改善が期待される。



今後の展開

一般の人でも手が届く桐筆筒へ 曲面を利用した桐筆筒も試作・開発

大手家具量販店の台頭に伴って、消費者の低価格志向は依然として強く、高級品に分類される桐筆筒は選択肢に上がりにくい状態となっているのが現状である。同社では、特に低価格志向が強いといわれる若い世代の人達に、職人が制作する優れた品質の桐筆筒の価値を理解してもらうことが使命であると考えている。今後も引き続き、消費者に桐筆筒の価値を伝えるための企業努力を惜しまずに行っていく。

そのために、消費者が桐筆筒に触れることができる機会

を創出し、地元の商業施設で開催されるイベントに積極的に参加していくことに加え、工場見学も受け入れていく予定である。

製品面については、現在販売している桐筆筒だけでなく、様々な用途に合わせた桐筆筒の試作・開発に継続的に取り組んでいく。特に、曲面加工を施した桐材を利用した筆筒の試作では、今までにない趣のある筆筒も仕上がってきており、桐材の新たな可能性を引き出す試作・開発を引き続き行う意向である。

